

壬午にいたる日鮮関係

—— 英大國領事報告を通じて ——

杉 井 十 八 郎

一

一九三二年（昭和七）五月に發刊した「歴史科學」創刊號に於ける比川修氏の「日清戦争までの日鮮貿易」と題する論文は、朝鮮市場に關する具體的な分析に關して、その後、信天清三郎、服部之總、井上清氏等凡そ近代に於ける日鮮關係を云々した人々の概ねよつてもつて依據したものである。

歴史學研究、一四九号（一九五一年（昭和二六）一月の南とく子氏の「日清戦争と朝鮮貿易」に於いても、この点は詳細に指摘されてゐる。いはば、この論文は、日清、日鮮の経済關係の基礎的な分析の成果と人皆の認めて来た所以であらう。

私のいま殊にとりあげる壬午の変（一八八二年（明治十五））までの貿易についても、比川氏の著作に連關するところが極めて多い。たゞ比川氏が論及

されたのは、開港以前（一八七六年（明治九））の日韓通商協會報告第三号に、開港以後は、大日本外國貿易十八年対照表附録、朝鮮旧貿易の統計を基礎とされたものであつたが、以下私の引用する諸統計は、駐日英國公使パークス（Haags-Parks）が本國に報告した貿易統計であつて、所謂ブルー・ブックに掲載されたものである。（Memorandum respecting the Trade between Japan and Korea: 1877-82. Japan. No. 2 (1883). Presented to both Houses of Parliament by Command of Her Majesty. February 1883.）

それに口次の様々諸種の統計が載せられてゐる。

General trade between Japan and Korea.

Imports of Japanese productions into Korea.

Imports of foreign (Western) productions into Korea.

*Japanese shipping entered and cleared at the
open ports in Corea.*

これらの諸統計には、それそれ概況の詳細な説明、將來の見通し（これはパークスの個人的な観測である）が述べられ、殊に次の様な點で注目すべきものである。

一、この期間に、清鮮宗屬關係の未だ明確にされなかつた時期であり、一八八二年（明治十四）五月の米鮮條約を手はじめに、八六年にかけて、英独露佛と朝鮮が所議、タマニの開國を行ふ直前の五ヶ年間にわたるが、日本による朝鮮貿易の独占——一八七六年（明治九）二月日鮮修好條規の締結以來、朝鮮と日本は、ひとり列國に先んじて「寛裕弘通」の交際が用かれ、「彼此の人民各自の意見に任ぜ貿易」することがはじめられた——を當時の駐日英國代表パークスは、どの様に觀察し、又これをどの様に本國にむけて報告してゐたか。

二、この統計によると、各種目についての單面を知ることが出来ないために、従つて通商物資の數量を把握することが出来ないが、一八七七年から一八八

二年上半年期までの日鮮貿易の輸出入品細目を知ることが出来る。しかも、これらの諸統計には比較的詳細な解説、及び彼の見解が附加されてゐるので、數量を把握出来ないと言ふ欠陥を伴ひながら、それは日鮮關係の當時の實際上の経済的な立場、性格を究明しうる處で見逃すことの出来ないものである。

三、次はパークスの報告自体からはなれた問題であるが、日鮮修好條規の締結に伴つて、この年の三月から九月にかけて、日鮮間の通商章程締結の交渉を外務大丞宮本小一が担当したが、この外交交渉から一八八二年（明治十五）八月、清物浦條約、次いで「日鮮修好條規結約」及び、「朝鮮國に於て日本人貿易の規則」の締結に至る年間に、兩國の政治外交上の事件としては、江華事件から壬午の變（京師事件）に至る期間であつて、その間に、わが國要路の朝鮮に対する考へ方の推移は、経済關係のそれとどの様な連關をもちつゝ變化をみせたか。

いま便宜上、以上の三點に焦點をしほつて考察を進めてみたい。而して以下の考察は、明治初期に於ける日鮮關係は、果して、信夫、服部、井上氏等の

規定した様な日本の産業の近代化に伴ふ後進開港市場としてのそれであつたか、或はまた、日本が特殊な産業の近代化に力点を置き、農村の課題を後進にしてい、米穀問題を朝鮮に托せんとした倉庫庫としてのそれであつたか、従来両国の経済関係の分析に使はれてゐる北川氏の前掲論考に改めて再検討を加へつゝ、日鮮関係とより明確にしようとするものである。

両国の政治史的推移に關しては、田保橋深氏の「近代日鮮関係の研究」(朝鮮總督府中枢院發行、一九四〇年(昭和十五年)三月)に従つた。

二

先づ、文一の表について、彼パークスの報告は、前述の様に上・下院に提出されたレポートであつて、一八八三年十一月、東京在住のパークスから外務卿克蘭ビル(Earl Granville)に宛てたものである。

彼は、この報告書に於て、統計の性格、出所及び日鮮貿易全般の見通しを次の様に述べてゐる。先づ統計の出所について曰、

「これらすべての統計表の數値は、在鮮日本領事から大蔵省に提出した統計(*the Finance Department's by the Japanese Consuls in Corea*)によつたものである、朝鮮に於ては、未だ税関がないので(筆者註、税関事務の規定が実施されたのは、一八八三年(明治十六)の「朝鮮国に於て日本人民貿易の規則」によつた。)この統計は、在鮮日本領事が朝鮮在住の日本商人から提供された報告が基礎になつてゐると思われる。」 *Presumed that they have been*

stated on information supplied by the Japanese Korean residents in Corea to their Consuls.

彼の言ふ *Finance Department's* が當時の大蔵省のものに當るのみ、同省系統の恒当局に當るのか、判然としないけれども、一般に英領事報告に表現される統計は、主なる基礎を取引地の日本側の役人の報告に置き、駐在外国領事はこれに対して改訂を加へ、乃至は全く独自の立場から評価し直すことが屢々あつたと思はれるもので、その改訂の度合は、その場合と当事者に從つて、それもれ相違があつたであらうが、當時のわが国の統計より曰、遙かに正

確であると思はれるものである、この場合に於て口
未だ朝鮮に駐在領事の置かれてゐないときであつ
たから、その意味に於ては萬全口保しがたいけれど
も、公文書に於ける貿易統計として信憑度の高いも
のとがしえよう。まして後述の様に、英國の朝鮮に
對する関心は非常に深いと考えられるから、敢えて
洵斷のことも考へられぬこともないが、有力な統
計資料たる資格を失ふものでない。

かくするとこの貿易統計は、究極的には北川氏のふられた統計と別系統のものといふべきであらうが、両者を比較すると、ある年度に於ては極めて近似した数値であり、又ある年度に於ては、非常な相違を現出し、両者の比較考究のみにては、非常に決定し難い。しかし英國領事報告に掲載されたこの統計は、北川氏所引の統計書と口その概況及び見通しの神説されたる点で、口口かに勝つてゐる。日韓通商協会報告及び外国貿易十八年対照表附録の朝鮮旧貿易の統計と合せて考究すべきものと考へらる。

during the five years from July: 1877 June 30, 1882.

統計表乙四、比川氏が大日本外国貿易十ハケ年対照表附録「朝鮮旧貿易」から得た数値と鉅紙換算率によつて補正算出したものである。(ハは甲の方)

Sheet D amounts mentioned in the following part

① 同様に換算としても統計表その他の懸隔口埋めつやうものでも可い。

表一 日鮮貿易統計表 (甲)

	1877.6.30 1878.6.30	1878.1~12.31	1879	1880	1881	1882.1~6.30	
輸入 日本製品	87149	29332	55647	116130	202069	47519	53,7846
外国製品	141405	113286	511306	861883	1742668	695043	406,5491
合 計	228554	142618	566953	978013	1944337	722562	(460,3437)
輸出	119538	154707	677061	1373671	1,282,657	877225	510,4859

単位 円

日鮮貿易統計表 (乙)

	1872.30~12.31	1878	1879	1880	1881	1882	1883	1884
輸入 日本製品	69000	47000	49000	79000	113000	125000	707000	210000
外国製品	55000	118000	428000	584000	1035000	968000	1036000	228000
合 計	124000	225000	467000	663000	1148000	1093000	1743000	438000
輸出	57000	173000	526000	851000	806000	764000	800000	437000

単位 円

次に、この年間に於ける日韓貿易の概況及び今後の見通しについては、第一表でその堅実な進展と窺ふことが出来るが、彼口最も注意すべき重要な事実として、外国製品の輸入の増加を取上げ、殊に輸入品の大部分が英国綿製品であることを告げ、それについてはい次の如く報告してゐる。

統計表によつて着実な進歩が見られる様に、外国品の輸入は日本との貿易が開始されて以來あらはれた現象である。そして、これは朝鮮民衆の要望によく合致してゐるからだと思はれる。よつて、外国製品に対する需要は朝鮮が現在より更に大なる便宜と、より安価にそれらを獲得出来る外国との直接貿易を開始するときに増加することが期待出来る。

日本の朝鮮貿易独占といふ形態にありながら、その実際上の内容に於て、英国綿製品が大量に日本から朝鮮に再輸出されてゐることは、駐在当国^{日本}の外交使臣としては、深い関心を寄せることは当然のことであつて、やがて、朝鮮貿易市場が広く公開された際には、英国商品に対する恰好の市場として多大

の期待を寄せたことも蓋し不思議ではない。

しかして、この期待は一八八二年（明治十五）^度の概況から、即ち約五ヶ年に渉る実績を通して、はじめてなされたものであるか、といふに、彼も言及してゐる様に、「外国品の輸入は、日本との貿易が開始されて以來のことであつて、この形況は、彼の別種の報告からも、知ることが出来る。即ち、大隈文書、A、三二五九によると、ジャパン、ガゼット紙の抄訳を見るが、（このガゼット紙は十二月二十四日行とあるが年次が不詳である。しかし内容から推すれば八七年（明治九）として誤りあるまい。）それによると、外務卿デルビー（Earl of Derby）宛信書に：

当ニヶ月間（貿易開始以來、筆者註）朝鮮への輸入總額は三七八三二円にして、又該国より輸出高は三二〇四九四円なり。日本より朝鮮へ輸送する商品は、過半綿布、洋布、絹布等外国の製造物にして、其

余は日本国産の米及び小麦を以てせり。朝鮮国の輸出品は重もに牛皮、朝鮮絹布（日本人を好む）、地金、人参及び其他の雜貨なり。

と報告され、日本から朝鮮への輸出品は、当初か

う既に英國の棉製品が土量と占めてゐたことを彼は深く注意してゐた。しかもガゼット紙は、「若し今後世界各国と朝鮮国との通商を開く時あらば、日本は決して斯くの如く一手に専売の権を掌握するを得ざるべきは必然なり」と論じてゐる点からすれば、同紙は殊に當時に於ける英國系の新聞であるが、朝鮮市場に対する英國の強い期待を裏書きし、その點は日鮮貿易開始以来のことであつたわけである。かくして彼の朝鮮貿易市場についての關心は、外務卿克蘭ビルに宛てた報告書作成に當つて、いひは思いつきで述べられたものでなく、従来の経過、実績をふまえて、英國商品市場としても極めて注目すべき市場として、早くから考へられていたことが明瞭であるし、又それは具體的な史料で確認することは出来ないが、日本在住の英國商人の要望をもとにした代辦者としての性格も充分に裏してゐるものであつたと考へてよい。

三

イ

次に次の問題点について考へてみよう。

次の表は、朝鮮に於ける日本製品の輸入状況を各種目品別に報告してゐる。

日本製品の輸入額は、五ヶ年間の全輸入額の八分の一で、銅がそのうちの三分の一を占めてゐる。推品の額は、銅の輸入額を差引いた残りのほとんど三分の一に當る土量を記録してゐることが、まづ顯著な現象であることに気付く。しかして、推品の内譯は註に掲げられてゐる様な物品で、朝鮮在住の日本人用のものと思われると、彼は説明してゐる。

彼は、全般的な見通しとして、今後日本製品のより大きな消費は期待出来ないと言つてゐる。これは輸入品目で銅、推品について継続的にあらはれてゐるのは、甲斐絹、絹製品の如き、所謂、当時の外國貿易に於ける日本の製品中の特産品であるが、この貿易に於ては、此等の購入者が朝鮮在住の日本人か、或は朝鮮の貴族階級のみに限られてゐる点を指摘してゐる見解から考へても妥当なものとしなくてはなるまい。

銅の輸入に關しては、彼は何ら説明をしてゐない。しかしこの銅輸入は実は日鮮貿易關係に於ける重

要の課題であつた。即ち、一八七六年二月の日鮮修好條規の締結に基き、更に宮本小一外務大丞が朝鮮に派遣されて、通商章程締結の任務を帯びて出発するに當つて、六月三日、寺島外務卿は三條太政大臣宛に宮本の携行すべき具体案を上申してゐるが、その内で銅に關しては、「宗氏公貿易の例に倣ひ数年間日本銅錫等を以彼の米木綿に交換するの道を兩き」と述べ、(漢文書略)朝鮮貿易促進の一助としてゐる。これに、日鮮修好條規の締結に當つて、朝鮮側から六ヶ條の要求が出されたが、その一條に、朝鮮国在留日本国民に、常平錢の使用を禁止すること、といふ項目があり、これは朝鮮側としては、通貨流出を憂慮したためであらうが、實際に通貨の原料である銅を全然輸入に仰いでゐた朝鮮としては當然の要望であつたとしても、このために日本側としては、唯一の通貨である常平錢の使用を禁止される結果、日本人は日用品の購入も支障を來たす結果となつて、朝鮮在住の日本人(商人)には徹底的な打撃を与えることになり、(近代日鮮關係の研究上巻四九一頁参照)いはゞこの對抗策として、考へ

られたのが、「公貿易を興し、米麦は定額數を以彼政府より我へ專賣し、我々は銅錫等を以て是に換へ雙方とも是等の品は人民の私売を許さざる時は、兩國政府多少の利潤を得て以人民貿易の費用を補ふ爲めとなせば亦銘義に於て害なく、彼の好む處の貨幣を用ひずして物を以て、物に換ふるの貿易をなすに庶幾せん」(外交文書第九三三頁)といふ公貿易之條陳書であつた。しかれども、いま統計の示す如き銅輸入の繼續並びに進展は、一八八二年代に至つても、宗氏貿易時代のないバーター制度が充ちられながら進められていたことを知る極めて注目すべき事實となれよう。次に南始年代のみに、米穀の輸入が記録されてゐることについては、彼の説明は別段なされてゐないが、前述のテルビ―外務卿宛の信書に、釜山在住の日本人の書信を転用して、次の如く述べてゐる。

商業は従前よりも益々隆盛にして、日本より輸送するものは何品にても売捌けざるはなく、中にも別して利益あるは米なり、(中略)米は当時甚だ排底なり

この年、朝鮮に於ける金權危機が具体的にどの様

であつたか明確にしえないけれども、以上の様な特殊の事情があつたことが知られる。(大隈文庫△三三九)
(△三三表参照)

表二 表 日鮮貿易 日本製品輸入統計表

	1877.6.1~1878.6.30	1878.7.1~1879.6.30	1879	1880	1881	1882.1.1~1883.6.30
銅	22105	7190	20155	44861	87134	16464
陶器・陶磁器	"	"	"	965	4376	2062
主平 (Haupt cloth)	1635	7373	870	105	"	"
紙製品	"	"	"	804	6147	911
漆器	"	"	"	1145	5932	990
酒 (Alcoholic beverages)	2257	1229	4446	14072	751	"
紙	"	"	"	"	2980	"
機械	592	"	1347	10162	8843	1318
メッキ	133	"	2322	1887	2065	"
蚊帳	245	"	279	2237	"	"
米	22692	"	"	"	"	"
甲斐絹 (Kawajin)	9586	3121	5622	8805	39516	9285
絹製品 (Silk manufactures)	1751	"	3313	9215	13320	2118
錫	2966	2640	"	"	190	870
全	391	246	946	1141	1736	461
雑品	22796	2412	16347	22968	26842	13040
計	87149	29332	55647	116130	202069	47519

註 雑品は、セロハン、菓子、薬品、味噌、食糧、油、煙草、布、紙、衣類家具、家庭用品等である。

□

第三表は、朝鮮に於ける外国製品の輸入状況を各種品目別に報告している。

日本より國を南くこと十余年遯れて、いまだ南國早々の朝鮮に、我國が外国製品の再輸出を行つたことは、貿易商の射利にのみ基因していつとするならば、余りに一面的な理解であらう。非常に大まかな表現が許されるならば、常時の日本の経済的な力に於ては、朝鮮に対する政治的な意識としては相當突き進んだことが考へられながら、経済力がそれに伴はなつたためにあらわれた現象であつたと考へられ、一方貿易商人達も、「臣の思想も亦是に於て一変せざるを得ざるなりし」(本書其の二「華露事件勃発に際しての露露報告」三條太政大臣死後清口案についての露露報告)といふ様な征韓論以来の傾向を一擲した積極化の政策推進に刺激されながら、朝鮮に進出し、しかも實際には自國商品を朝鮮に売捌く国内生産力、工業力の裏付けをもちえなかつたのである。いはば當時の日鮮関係は、政治的には相當に進みながら、経済的には未だ古い段階にしかとどまりえない現象をこの統計は如実に物語るものと言えよう。

パークスはこの統計の説明にあつて、まづ外国

品輸入の経路を三つあげている。

此処に見られる商品のほとんど大部分は英國製品の粗悪なもので、日本商人が上海で購入するか、長崎で朝鮮向商船に移積するか、或は神戸から朝鮮に直接船積するかであらう。

更に彼の説明によると、朝鮮に於ける生産経営の段階は極めて低く見做されてをり、強くて、持ちのよい、安価な英國毛織製品 (*cheap British cottons strong and durable texture*) の発展に多大の期待を表明してゐる。しかして、この現況から朝鮮が世界市場の一環に繰入れられた際の英國の進出と日本貿易の不利を概況で述べたのである。しかし彼はこの統計の説明の箇處で、次の様な統計の欠陥を述べてゐる。即ち、この統計表では価額だけが判明して、数量の説明がないので、これら英國製品の日本兩港場輸入価額と朝鮮兩港場輸入価額を比較することが出来ないのを遺憾としてゐるが、自國製品の場合に寄せる關心としては誠に當然なことである。(本書參照) 但しこの統計上の欠陥は該報告の全般に涉ることであるが前述の様に比川氏及び南氏の引くところの統計も同様の欠陥を持つてゐる。

第三表 日鮮貿易 外國製品輸入統計表

	1872.6.1~1878.6.30	1878.7.1~1883.1	1879	1880	1881	1882.1.1~6.30
銅 招 貨	"	"	"	4915	31030	2874
綿織物製品	116624	95619	459564	740379	1521412	576365
綿 糸	9164	614	2250	8675	"	"
綿 葉	1685	1151	14276	19243	2048	"
染料	"	"	834	785	11487	5076
ガラス製品	11809	6549	24167	40789	75295	22280
鉄 櫃	"	1292	2377	546	4359	1021
ニッタル	"	5865	"	2739	"	"
絹織物製品	1205	"	1399	7612	17559	"
錫	"	"	"	1801	3717	7819
ト タ ン	918	"	486	23854	35943	7411
推	"	2196	5953	3563	5507	608
計	141405	113286	511306	861883	1742668	695043

註 綿織物製品は金巾、白い麻巾 (Keimbrick)、寒冷紗、T. dothe 等である。

第四表は、朝鮮からの日本向輸出品についての統計表である。大勢としては、第一表の輸入總額と比較すると、この五ヶ年間の年間集計額に於いて、朝鮮口五〇一四二二四の出超である。輸出品の主なものは、米、豆類、金屬（金、銀、青銅、金貨主として砂金）海産物、毛皮等である。中でも米は輸出品の第一位で、金がこれに次いでゐる。

米のこの五ヶ年間に於ける輸出額の總額は、一五二九六三六四に達し、年間平均三〇九八七九四である。しかし、この輸土情況は、統計表の示す様に各年次に於いて非常な波がある。九一年の總計を知ることが出来る、七九年、八〇年、八一年の三年をとつてみても浮動のはかしかつたことは明瞭である。この浮動を説明すべき直接的な原因については、彼の解説は決して充分ではないが、大要次の様な説明がなされてゐる。

（前略）時折東京にやつて来る朝鮮人から集めえた報告からすると、朝鮮に於ける米の値段は、日本に於けるそれのわづかに三分の一であると云ふことがわかる。（日本に輸入される米の量は大きい

けれども、いすれの年に於いても、輸入された最大の量に於いてさえ日本の消費量と比較してみると極く少量であるので、現在の様に、西國に於ける米の關係値段が續く間に、極めて多量の米穀が日本に輸出されなかつたことが奇異のことである。

（中略）この原因は、米の売買が朝鮮人官吏のうまさの制限の下にあるからである。（公貿易の規定が米穀に關しては存在した。筆者註、前述）若しこの売買が自由に許可されたならば、朝鮮人自身の必要物資に欠乏を来す程にまで輸土量は増大するに相違ない。自由に米が売買される際は、その値段は下規則に騰貴し、米は日本に於けると同じ程度に主要な食糧品であるので、その騰貴した値段は、その他のすべての生活必需品の比例した値上りを伴ふであらう、その結果、甚しい窮乏が多く、國民生活の上にのしかゝるに違いない、その故に、ごく少数二、三のもの、直接に利益をうけることにあらう。（中略）最近の報告はこれ等の予思が眞実でなかつたことが明かにされたけれども、朝鮮に在留する日本人から今年上半年（一八八二年）間に上げたレポートによると、異例の凶作が

予想された。それ故に米の輸出に起つた売行の減退は、(中略) 飢饉の恐怖に対して、米の取引について立てた対策による大きな制限にわざわいされたものである。

一八八一年に米は日本から主としてオーストラリアに輸出された。その額口しめて二六一七三五四にのほつた。そして、この輸出は生産地から外人だけがそれを購へ土着る港へ所要諸至費なかつたならば、より大きく増大したに違ひなかつた。

それ故に、若し、米の現今の低い値段が朝鮮に於いて続くならば、そして朝鮮官吏が国内の農業の発展を阻害してゐる誤謬を反省するべく仕向けられるならば、朝鮮官吏が西欧諸国との交際から、より広い経済的な観念を獲得するときに、売手にも又買手にも、双方とも有利であるこの米の合理的な貿易は、日本とはなく、他の世界の諸国との間に求められるであらう。

以上のパークスの報告に於いても、既に明瞭の様に、朝鮮米の輸入は日本の不足をカバーする性格のもので口ない。彼の指摘する様に一八八一年に

於いて、日本は二六万弗余の米を輸出してゐた。この様な米穀輸出の状況は日本の統計の示すところに従ふと、一八九〇年から一八九四年の日清戦争開戦前までの期間を見ても、米穀の輸入は五ヶ年平均五六万石、輸出は六九万石であつて、この時表に於いて朝鮮が食糧資源の供給地でなかつたことは明瞭にゐる。たゞ米穀の輸送、取引の行はれた最大の要因は、彼も指摘する様に、廉価であつた点であつて、たゞ彼も朝鮮が広く国際的な舞台に入つて来る際の米穀供給地としては有望な目途を有してゐると考えたことは察するに余りある。しかし、当時の日本の様に、假令国内消費量を上廻る生産を米に期待しえても、国内船舶で米穀をその主要な生産地から外国市場に輸送することは不適當であり、且又不可能に近いことであつたことを思い合はせると、いくら廉価な朝鮮米であつても、これを他の外国市場に流す自国船舶運送費にとられて利潤を充分にあつけないと考へられるから、朝鮮からのかかる継続的な米の輸入は、むしろ他の條件、理由を深く追究してみなくてはならぬまい。

なほ、朝鮮との貿易に當つて、自国船舶航路が盛

要四表 日鮮貿易 輸出品統計表

単位 円

	1876.1~1878.3.30	1878.1~1878.12.31	1879	1880	1881	1882.1.1~1882.6.30
海産物	13266	25115	69500	99469	190953	124146
米	29997	22367	351494	227996	381295	16487
大豆	16022	13309	99122	119246	199060	110293
金	14987	22494	66329	118383	512143	332318
人	544	2014	2216	8325	46019	484
木	"	"	"	985	14043	52137
綿	"	"	"	10092	33250	"
生	"	"	"	193133	330431	176337
平	19546	50450	59229	506	26731	2567
製	"	"	"	1806	3238	3785
品	"	"	506	1806	3238	3785
皮	"	"	506	1806	3238	3785
品	"	"	506	1806	3238	3785
槽	"	"	506	1806	3238	3785
生糸・つむぎ	17761	10951	10805	24502	111255	10708
油	7415	8007	17200	19218	33733	44525
計	119538	154707	677061	1373871	1882657	897225

註 海産物とは あわび・むしこ・乾物・海藻等である。

號五表 朝鮮南港場への日本船舶出入表

		1872.6.1~1872.8.30	1872.7.1~1872.12.31	18779	1880	1881					
入港船舶	蒸汽船	10隻	7	30	6425	39	12548	51	16938		
	帆船			11	783	118	10024	135	10617		
出港船舶	蒸汽船	210	191945	136	14025	614	60262	495	49058	232	22084
	帆船	10	1899	7	1306	29	4690	40	13004	50	16737
和船	帆船					9	628	121	9686	132	10310
	和船	218	20250	130	14006	619	56505	558	55633	264	24744

註 Ⅰ) 西洋形船舶はすべて噸数、和船は石数である。Ⅱ) 石はポントンに当る。

Ⅱ) 1872年の統計はこの報告には統計なしとして記載されてゐない。

附表 1881年の日本船舶南港場別噸数表

	西洋船舶	帆船	和船	計
釜山	25823	19669	5703	51195
元山	7852	1258	154	7264
計	33675	20927	5857	60459

註 和船はヤマト装の如くして496隻出入し、4668石で噸数5857噸とした。

無であつたわけではない。彼の報告によると、第五表の如き出入船舶数及び噸数が掲げられてゐるが、その説明に當つて、蒸汽船は全く三菱汽船株式会社に独占されてゐることを告ぐ、同社は神戸、長崎から朝鮮の南港場に定期便を開設してゐたことを報告してゐる。事実、一八七四年九月に三菱に下附された「ニ命令書」によると、運輸費助成金として、年額二五万円が助成金として下附されることになつてゐたが、その内五〇〇〇円は、長崎五島村州及朝鮮釜山浦間の航路助成金に充てられてゐた。(海運史料)これは長崎縣嚴原支庁出張所大馬山崎忍之助の書翰にも、「本年(一八七四年・筆書註)二月より航海の三菱汽船あり於此諸般頗る便宜に涉つたことを伝えてゐる」(大日本外交文書 卷九、一〇〇、附屬書三)。

しかしながら、三菱会社の定期便開設に伴つて、朝鮮貿易が急激に変貌したと考へられない。輸出の統計表に見られる品目及びその具体的な交易條件からしても、むしろ一八八二年代に至つても猶古い日鮮關係の貿易形態が残存してゐたと思はれる節がある。銅の輸入に於いて、将又前述の米の輸出に於いて、貿易実施に當つての朝鮮官吏の貿易制限等

々、そこで私は次の問題点について考えてみよう。なほ北川氏の「全部朝鮮沿岸航路を独占してゐた日本郵便船会社の船舶によつて行はれた」とするのは誤りであることは言ふまでもない。

三

この間の経緯を明瞭にするためには、まづ日鮮貿易に關する交渉を検討してみなくてはならない。

江華島事件の解決のために、朝鮮に向つた黒田辨理大臣、井上副辨理大臣は朝鮮国判中樞府事申禮並びに訓導玄普團と談判を進め、日鮮修好通商條約の商儀が繰返されたわけであつたが、文三回会商の行はれた後で(一八七四年三月十日)、逐條審議の團營方法として隨員の私的な会談が行はれた際、申禮の旅宿に赴いた宮本小一外務大丞、野村浩權大丞は、朝鮮側の日鮮修好條規案討案の意圖を知ることが出来た。ところが、日本案の文四款「今ヨリ従前、慣例ヲ改革シ今般新立ゼル條款ヲ遵準トシ云々」に対して、朝鮮側では、「從來宗氏歲遣船公貿易ノ事ハ朝鮮政府ノ欲ゼカル所ナルニ付キ従前ノ慣例ヲ改革ストハ、歲遣船公貿易モ亦甚中ニアリヤ否彼ノ意未タ安

ンゼサルナリ故ニ慣例ノ下ニ炭置船公貿易等の数詔
ヲ如ヘント欲ス」と云ふ要望を述べて来た。(大日本外交文書 第三三三)
その結果、同年二月二十七日に調印締結された日鮮
條好條規、又四款に於いては、「今ヨリ従前ノ慣例
及炭置船等ノ事を改革シ云々」と定められる筈な程
過があつた。

日鮮關係の正常化に當つて、朝鮮側が宗氏を仲介
とする公貿易を嫌惡し、従来の制度を改革すべきこ
とを企図したことは非常に注目すべき事柄である。
これが何に由來したか、明確にしえないけれども、
炭置船の接遇は、草梁公館滞在中心、水夫に至るま
で、朝鮮は軟待接遇の責を負ひ、その「礼數煩雜な
る而已ならず、朝鮮政府の費用貿易品の定額を除き
、右の雜事に支給するところ、頗る多し、故に朝鮮
政府も是を嫌惡す」とあり、(大日本外交文書 第三三三)
緊文辱札的な契が日本側からも指摘されてをり、当
時の朝鮮にとつても、煩はしい性格のものであつた
ことは否めないことであらう。

しかし、さうした關係にありながら、現実には、
一八七四年から開かれた日鮮貿易關係に於ては、従
来の経緯からも勢い古い形態を脱却しえず、我國の

正式交渉當事者達も對馬貿易に於ける宿弊の根基が
耶豆にあつたかを僅かに窺知しながら、旧對馬藩主
の誇張的意見と是正しえず、將來の日鮮通商章程
は、對馬住民の生活を維持することに重きを置き、
當分現状維持を可とするとしたことは、③黒田辨理
大臣から三條太政大臣宛の日鮮條好條規の履行運營
に關する上申中に、

宗氏炭置船公貿易等ノ事ハ條約面院ニ廢止シタリ
、但従前對州人民朝鮮人民ニ對シ、商法上其他共
軟面貪慾或ハ強臣ノ風習アリ、（此處ニ種ニ觀シ或ハ故漢シテ
米根ヲ賣リ取ノ類）
此積弊今以痼疾トナリ客易ニ改正シカタキ件々有
之趣ニ候、此惡弊一洗セザレバ、朝鮮官民ヨシテ
、新條約ニ從ヒ面目ヲ一新セシムルノ期ナカルベ
シ、故ニ此地ニ限り、當分ノ内、禁令ヲ設立シ、
犯禁ノ者ハ該地居留官貢連ニ懲罰ヲ施シ追々内地
人民輻湊ノ節、右惡弊ノ伝染セサル様前以取締改
正ノ御処分有之度候

とあることから明らかなであるし、(大日本外交文書 第三三三)
更に一步を進めて、近く日鮮通商章程の商議の開か
れると云ふ時期（六月）に當つて、寺島外務卿から
三條太政大臣宛の具案上申中に、前掲の「公貿易ノ

條陳書」といふのがあつたが、その中で

(前略) 対州ハ朝鮮ニ附近ノ一孤島ニシテ、土地瘠薄、居民ノ米糧本州所産ヲ以給スルニ足ラス、年奉宗氏公貿ヨリ得ル処ノ朝鮮米ヲ補足シテ、是不足ニ支給ス、今此糧道ヲ断ツ時ハ、必ズ九州中国ノ運米ヲ仰クナリ、然ルニ毎度船運ノ絶ヘタル時等、米価非常ニ騰貴シ、居民困苦甚シキ事アリト云、今政府朝鮮ヨリ得ル処ノ米ヲ以、年々対州人民ヘ売却スル時ハ、此弊少ク、居民安堵スルヲ得ルト云、且日本政府朝鮮交際貿易ニ付、費スルノ費用ノ一半ヲ償却シ得ル也」と述べられてゐる意見からすると、現実には新立條約に基いた日鮮貿易關係に対する考へ方は、朝鮮側の所期する形態ではなく、むしろ、対馬宗氏による朝鮮貿易の形態をかへつて色濃く持つ様になつたことが明かである。しかも、交渉当事者であつた宮本外務大丞からの顧未詳報によると、

米銅交換法ハ即チ公貿易ノ純粹ナル者ニ付、之ヲ沿襲スルトキハ他ノ旧弊革除ノカラ失フノミナラス、政府銅ノ專賣ヲ爲シ、人民自由ノ売買ヲ許ササル等多少不難ノ影響ヲ主スレハ、我ヨリ進ンテ

此事ニ議及セス、彼ヨリモ公貿易ヲ爲サレハ、土ニ垂涕ヲ省クトノ旨ヲ語リシ事モ有り、彼レ敢テ旧章ヲ饒憐セサル様子ニ付遂ニ談判ニ及ハスシテ止メタリ (日本外交文書目録)

とあるが、これは、我から進んで改革の斧を振出す、いはば實質的に口従来ノ交易とは變化を求めない現状維持策であつたことが知れる。

又曰、以上の様な事は、元山、仁川西港の兩港交渉の経緯にも、その一端を窺ふことが出来る。即ち、日鮮修好條規、又五款によると、「京折忠清全羅慶尚咸鏡五道ノ沿海ニテ、通商ニ便利ナル港口ニ個所ヲ見立タル後地名ヲ指定スベシ、南港ノ期ハ日本曆明治九年二月ヨリ(中略)數ヘテ二十個月ニ當ルヲ期トスヘシ」とあるから、釜山以外の二つの南港場所は、少くとも、一八七七年(明治十)十月には南港の選びと定まらずであつたが、條規の締結後、この交渉は少しの進展も見せず、剩る、西南の役の爲めに政府は朝鮮問題に顧みる暇がなかつたことにもなるが、南港地未定すら未定の有様であつた。しかして、元山の南港は、一八七九年(明治十二)八月に協定が成立し、仁川の南港は、これよりずつと遅れ

て、一八八一年（明治十四）二月に開港が決定されたが、——而して実際の開港は、元山は一八八〇年（明治十三）十月に、仁川は、壬午の變も介在して、その開港は、一八八三年（明治十六）一日——この様に開港場の設定が遅れたのは、日鮮兩國内の特殊な事情も影響してゐるが、遠延の理由に、朝鮮港湾について日本側の認識不足を挙げなくてはならぬことは言ふまでもない。（この間の事情は田保高氏の「近代日鮮關係」の研究によき、第十四章に詳述されてゐる）この日本側の朝鮮港湾に關する認識不足は、この時期までの日鮮貿易關係が、主として釜山を経由して行はれたもので、元山、仁川を開港場とする貿易關係を、新立條約上の既得權として要求しながら、現實には、まだその途が開かれてゐない、よつて、この二港は、当初から必須のものとして考へられぬ貿易關係の狭さと深い關係があつたと見てよいであらう。

結 び

日鮮貿易關係に於ける、輸入品目に於いて、外國製品、殊に英國製品の日本からの再輸出が、極めて盛大に行われたことを注目したパークスの立場は、

朝鮮市場に對する英國の關心を示すものとして、我々の深い興味を覚えることである。朝鮮市場が、広く國際經濟圈に入つた際の有利な市場たることを報告した彼が、その後數年にして北京駐劄として転勤し、朝鮮問題に活躍したことを考えると、更に深い縁田を覺えるものがある。又、この時期に於ける日鮮貿易關係が、米、銅の交易形態からも、未だ古い対州貿易の色彩を濃厚に残存してゐたことは、極めて重大なことであつて、むしろ、この時期に於ける日鮮關係口、対州貿易の延長であり、政府、外務省首腦部に旧対州藩吏の意見が、強く反映してゐたことは、政府、外交上の關係に經濟關係が、びつたり隨伴して行かなかつた状態を明瞭に示すものである。而して、かうした經濟關係口、日鮮貿易關係の交易物品の内譯を仔細に分析することはかりでなく、政府の展開する日鮮外交交渉の上にも、これを明確に指摘しうる。

總じて、當時の日本政府要路の朝鮮に對する理解は、決して従来一律に座べられて来た様な、貿易上の緊密不可離の市場や、占領、統治すべき対象地でもなく、又食糧供給源としての必須の原料地でもない

く、対馬の旧藩吏によつて誇大に報告された貿易関係地であつて、主午の變にいたるまでの日鮮關係に於いては、対馬の位置を高く評価することも強ち不當のことではない。(昭和三十一年十二月)

註

① 明治土正政史、九六頁(小林比崎共著)

銀貨二円に対する紙幣價格平均数字にしろ。

② 同報告の別の箇處には又次の様な記述がある。

汽船の噸數はほとんど三菱汽船株式会社に局限され(中略)商社口神戸、長崎から朝鮮の港に定期便を(中略)帆船(スloop)はほとんど大部分長崎、下関から航行する(後略)

(*Japanese Shipping (by native or foreign built) enters and clears at the open port area.*)

③ 旧対馬藩吏の意見が政府外務省蔵部に反映したところを参考口、田保精氏の「近代日鮮關係の研究」上巻、六八三頁に見えろ。

(附 記)

本稿口その主題と英國領事報告の紹介、考察におき、当時の國際的關係及び日清各々の歴史的発展段階から一定抽象して、その貿易經濟關係自体の究明にのみつとめた。従つて主午の變までといふ時期的な限定もある様に、これに依つて日清戰爭の因襲にまで論及するところ口の住で口口口以後の日鮮關係について改めて論ずることを心する。